

主体としての自然

——シェリングと安藤昌益——

西川 富雄

一

「単なる所産としての自然（所産的自然 *natura naturata*）を、われわれは、客体としての自然と呼ぶ。そして、産出性としての自然（能産的自然 *natura naturans*）を、主体としての自然と名づける。」⁽¹⁾

これは、一七九九年、イエナの学界にすでに颯爽として登場していた若いシェリングが述べた一文である。自然を「主体（語）として」als Subjekt 捉えようとする彼の自然哲学のモチーフには、それに先立つ西欧近代、十七・八世紀の自然像への二つの批判がすでにこめられていた。

ひとつは、広く思想的なペースペクティブにおいていえることであるが、F・ベーコンにみられるような、人間による、外的

世界、自然の技術的支配の思想への批判であり、いまひとつは、ニュートン力学をモデルとする近代科学のメカニスティクな自然把握への批判である。⁽²⁾

シェリングが、「客体としての als Objekt 自然」というとき、

それは、近代科学が対象として、近代技術が被支配対象として客体化する自然を指す。それを転換して「主体としての自然」の概念を確立するというのは、カウルバッハ的に言えば、科学や技術によって「足枷をはめられた自然」*sefessale Natur* を「自由な自然」*freie Natur* へと転換することでもあった。シェリングは、生きた *lebendig* という形容詞を好んで用いる。機械論的因果の連鎖として「死んだ」自然ではなく、「生きた自然」。その自然こそは「主体として」、みずからの内に創成の原理を宿し、その意味でどこまでも、自己産出的であるとみなされる。⁽³⁾

事象の、みずからを生み成していく相において、ピュシス(自然)の概念を成立させていたのは、ギリシア人の意識でもあろうが、事柄の「自ずから然ある」相において、自然を表象する意識は、わが日本にもあろう。わけでも、安藤昌益は、自然を「自り然ル」事柄の相において捉え、人為の自然を斥けた点で、われわれの注意をひく。

時と所を隔てつつも、自成の原理を内に宿す自然の概念を共有する思想家、哲学者のいることに私は興味を覚える。

二

それでは、シュリングの「主体としての自然」とは、どのようなものであったか。それを明らかにするには、まず、カントとの関連に眼を向けるのが有効であろうと思う。

カントにおいて、自然像は二様に描かれる。因果連結としての事象の系列 *nexus effectivus* と、目的結合の連鎖 *nexus finalis* とである。⁽⁴⁾『純粹理性批判』における「現象の総括」*Inbegriff der Erscheinungen* (vgl. *Proleg.* S. 36)としての自然概念は前者に属し、『判断力批判』における、自然目的 *Naturzwecke* の体系としての自然概念は (vgl. *K. d. U.* S. 67) 後者に対応する。

周知のように、カントは、『純粹理性批判』において、経験 *Erfahrung* 一般の可能的制約を解明した。そして、経験一般の可能的制約とは、同時に「自然」成立の可能的制約にほかならず⁽⁵⁾。

その自然を対象領域として、経験認識は成立する。ニュートン力学の成立する領域も、デカルト派哲学の求める自然も、カント的には、「現象の総括概念」としての自然なのである。その自然概念こそは、ア・プリオリな「原則の体系」に従う連関として、⁽⁶⁾いわば範疇的悟性によって構成された、まさしく「客体としての自然」にほかならない。その自然が *nexus effectivus* とも呼ばれた。

その呼び方は、一方、事象の世界を目的結合の系列 *nexus finalis* とみなす自然像を予想していた。ここで、『判断力批判』での有名な語り口を想い起こしておこう。ひとは、一本の草の茎の産出をメカニスティクな自然法則に従って説明しようとする一人のニュートンの出現を、期待することはできない (S. 65) と。ほっそりと伸びた草の茎の形状とその現存在は、経験科学のメカニスティクな認識では必然化されない。因果結合の系列では、それはどこまでも偶然である。それを必然化しようるのは、その草の茎の形状や現存在が、合目的 *zweckmäßig* と判定されることによつてである。合目的性を原理として判定するとは、事象を「目的」*Zweck* として可能であると洞察することにはほかならない。判断主体との関係において *in Bezug auf*、⁽⁷⁾ 事象はそれ自身、自己目的的に在ると判定されるとき、事象世界は *nexus finalis* として成立する。そこに「自然目的」の総括としての世界が、*nexus effectivus* とは別の自然として成立する。

このようにして、カントによれば、ひとは「目的の規則に従った体系としての全自然のイデー」(K. d. V. S. 67, 77)に至ることになる。

もとより、カントにおいて二様の系列として描かれた二つの自然は、たかだか一緒に連れ添う *beigesehen* (ad. S. 81) だけであつた。ホワイトヘッドは、自然に關しては、プラトン以来、二分化 *bifurcation of nature* の思考が支配的であつたといふが、カントもその外にはありえなかつた。

三

カント的には、「連れ添う」としてしか語りえなかつた二つの自然像を、ひとつの原理から統一するのが、若いシェリングの抱負でもあつた。

カントが、二分化の思考にこだわらざるをえなかつたのは、その批判主義の故にであらう。批判主義の考察法は、有限な悟性の立場、分別的な *diskursiv* 悟性の立場であり、なお付言すれば、分析的、かつ還元論的である。それに対して、シェリングの思惟は、知的直観 *intellektuelle Anschauung* であり、その特徴は、総合的であり、かつ全体論的である。そうした思惟で以て、彼はメカニスティクに捉えられる現象的自然の根底に、オーガニスティクで、テレオロジカルに捉えられる自然全体のイデーが、客観的に確立されるはずと考えるのである。

彼は、「イデー」の中で説く。自分の求める自然全体というイデーのもとで、カントの二つの系列、*nexus effectivus* と *nexus analis* とは合一し、その合一において自然はみずからのうちに還走し *zurücklaufen*、自己自身において完結した円環 *Kreislauf* を描く。すなわちそれは、体系をなすということにほかならない。体系をなすものとして、自然は全体であり、全体としてそれは自己目的的である。カント的にいえば、「自分自身を有機的に機制づける在り様」をとるものである。⁽¹²⁾「原因と結果との同時性」が語られうるものとして、それは自己産出的でもある。そういうものとして、一言でいえば、自然は、どこまでも、産出の働き *Produktion* として捉えられる。

当時、先輩フイヒテは、純粹意識の自己定立 *selbstsetzen* の働きにおいて、自我の存在は演繹されうるとして『知識学』を講述していた。その影響下に哲学を始めたシェリングは、自然哲学の原理を求めるときも、フイヒテ的であつた。それは、活動的であること、行為的であることのうち、存在をみる存在論をとつた限りにおいて、いえることなのである。⁽¹³⁾

およそ、ザイン *sein* が繫辭的であるのは、特殊化された基体に關してである。述語的限定を主語へとつなぐ媒辭であるからである。しかし、絶対的に在ること(端的に在ること) *das absolute Sein* としてのザインは、繫辭的ではない。それは、限定される以前の「存在一般」として、シェリングによれば「最高の構成的活

動性 constructivende Thätigkeit 以外のなにものであらず⁽¹⁴⁾。

そのようにして、「純粹な自己⁽¹⁵⁾」の働き「Tahandlung」という概念の影響のもとに、シェリングは、自然の存在は本源的に活動性、産出性として語られうると考えるのである。それ自身において産出性の原理を宿すものとして、自然は、また自律であり、自足してもいる。当然ながら、そうした自然は、ひとつの生動的な体系をなす。小さいにせよ、大きいにせよ、自然現象は、「自己自身を有機的に機制づける在り様」をとるものとして、オーガニスティクな自成の世界とみられる。その自成の過程の叙述が彼のデユナミクでもあった。しかしその細説は、煩瑣にわたるので、略して次に移らう。

四

それでは、安藤昌益における自然概念は、どういふものであったか。昌益において、自然とは、「自^{おの}り然^すル」在り様をいう。「夫^こレ転定^{てんてい}（天地宇宙のこと）ハ自然ノ全体ナリ」（自・七）という昌益は、「転定運回シ時行ハレテ、万物生生シ竭クルコト無キハ、無始無終ナル自然ノ直感、進退スル直耕ナリ」（自・第一序）とも述べる。そしてその真実相は、「自^{おの}り感^かク自然ノ所行ナリ」（同序）ということに求められた。

「自^{おの}り感^かク」自然とは、シェリング的にいえば、自然は、本来、産出的であるということではないか。そしてその自然の全体、

転定^{てんてい}はみずから「生生」するものとして、自律的、自足的とみられる。「オノツカラなるもの」としての日本の古来の自然概念は、昌益のそれのなかに蘇生し、「主体的自然」として立ち現われたという見解は、私の興味をひく。事柄の「自^{おの}ツカラ然^すアル」相として自然を捉える思想は、日本古来のものとすれば、昌益の「自^{おの}り然^すル」自然は、まさにその蘇生なのであろう。ただし、「自^{おの}ツカラ然^すアル」自然概念に伏在しがちな、超自然的撰理（たとえば、ギリシアにおける運命とか、中国における天とか）に「身を委せて成るがままに」といった思想は、昌益にはない。「自^{おの}り然^すル」自然は「自^{おの}り感^かク」ものとして、自成的原理を内在しているといわねばならない。

※寺尾は、その「安藤昌益の自然について」（『直耕』創刊号、一九八八年五月）において、昌益の自然は「自^{おの}ツカラ然^すル」ではなく、「自^{おの}り然^すル」であることを強調し、そこに「自己運動」の原理をみる。筆者は、安永と共にむしろ前者の蘇生が後者であるとみて、そこに「自成」の原理をみてとりたいと思う。つまり、世界は自己産出的であるとみるわけである。

私は、シェリングと昌益の自然概念を、西欧の伝統的なターミノロジーで置き換えれば、エンテレキーの概念で以て共約できるのではないかと思う。entelechyとは、テロスとエケインとから成るとすると、それは、「その目ざす目的をみずからのうちに有する在り様」ということになる。すでにアリストテレスにおいて

もみられるように⁽²⁰⁾、それは、内からの自己実現、自己成就を意味し、勝義には、オーガニスティクなあり方のなかに働いている。シェリングによれば、産出性を原理とする自然は、力動的な有機的機制 *dynamiche Organisation* の過程とみられる。それは、自成一の原理を内に宿したる方であり、昌益的にいえば、「自り感キ」「生々竭クル」ことのない過程である。それは、テロスを内在したものと合目的である。ここで、目的というのは、全体を指す。目的論的といっても、それは、(外在的な)いしは超越的な) 目的のない目的論(目的)は、どこまでも全体の在り方のうちに内在して過程の方向性を意味するといった目的論である。^{*}

このようにして、エンテレキーの概念から共約できる二人の自然概念では、世界は「生々」の過程として描かれる。シェリングでは、自己産出性の原理は、分極的対立 *Polarität* を通じて三層位 *Trias* の展開を遂げる。⁽²²⁾ そこから、世界は自然史過程として叙述されることになる。昌益においてもまた、「生々」は、「互性」(性ヲ互ヒニス)の論理から説かれる。「互性活真」、「二別一真」というタームが物語るように、「二ニシテ一」、「一ニシテ二」なる条理を践みつつ「生々」の世界はみずから形態づけ、そこに自然の「妙序」は成立する⁽²³⁾という。

シェリングにおける自然の自己産出過程、昌益における「生々」過程の叙述は、ここでは省こう。筆者の強調したいのは、い

ずれの場合にも、自然はその本源相においてとらえられると、いわゆる「自然と精神(人間・社会・文化)」との「二元的分離」は通用しないことである。今や、かつての近代的思惟における基本的構図は崩れたといつてよい。シェリングにとつて、「精神」は眼ざめた自然であり、「自然」は眠れる精神である。自然は、可視化された精神として「先なる自然」 *natura prius* であり、不可視的自然としての精神は「後なる自然」 *natura posterius* である。⁽²⁴⁾ そこには、精神・人間と自然との二元的分離はない。

昌益においても、「転定モ自り然ルナリ。人倫(ここでいう「精神」：筆者)モ自り然ルナリ。故ニ自然ノ世ト云フナリ」(自然世論全集二一九ページ、渡辺大壽『安藤昌益と自然真営道』勁草書房、二九二ページ)と語られている。そこには、ひょっとして、ホッブスの自然主義が看取されるかもしれないが、私はむしろ、安永と共に昌益の自然において、人間と自然は無媒介に連続し、人間と自然との「共同主体的関係」(前掲安永論文、五二ページ)が成立することに着目したいと思う。

近代的思惟の構図においては、精神・人間は、常に自然の外に位置し、自然を客体化した。自然は、精神のいわば疎外態でしかなかった(このことは、ヘーゲルにおいてもいえる)。今や、両者は連続と共生の一元的システムへと繰り込まれる。精神・人間は、自然の外でそれであるのではない、自然と連続し共生する間柄において精神・人間なのである。⁽²⁵⁾ ハイデッガー的にいえば、近代人の

故郷喪失は、精神を包み込んだより大いなる自然の本源相において回復されるものなのであらう。

昌益の説く「直耕」とは、まさしく、「行為的直観」的にその本源相とひとつになる思惟をいうのではないか。それは、ただ耕せば事足りるというのではない。世界の「真実相」とひとつになる直観 *intuitio*、プラトンの的に言えば、事柄の真実形相、イデアを認識するヌース（理性）の認識、シェリング的には、知的直観の認識ではなかったか。そういう思惟方法を通じて、「制事」の背後に、「自り然ル」事柄の本源相に帰入しえたのである。そこから描きあげられたコスモロジーは、シェリングにおいても、昌益においても、煩瑣に陥りがちではあったが、大事なことは、遠く離れた二人の思惟の「比較」の根底に看取されうる自然の本源相である。それを頭わにすることは、必らずしも、近代以前の中世や古代の原始に復帰することを意味しはしない。そうではなく、自然の近代的抽象態の彼方に、自然の本源相を看取取ることである。そのことが、西欧近代を批判的に超え出る道を観望する所以でもあらう。

※ところで、このように、テレオロジカルに、世界を、その内に方向を宿した過程として描くとき、そこに果たしてサイエンスと呼ばれる学知が成立するのかどうか。成立するとすれば、その学知は、近代の、メカニズムを原理とするサイエンスとどうちがうのか。いわば、*Science* の成立可能性を問う形而上学は、将来哲学の難問である。

- (1) *Einführung zu dem Entwurf eines Systems der Naturphilosophie, oder über den Begriff der spekulativen Physik und die innere Organisation eines Systems dieser Wissenschaft*, 1799, Werke, herausgegeben von M. Schröter. II, S. 284.
- (2) シェリング自著『近代科学知の技術知への批判』『Darlegung des wahren Verhältnisses der Naturphilosophie zu der verbesserten Fichteschen Lehre』, 1806, W. Schröter, III, S. 595~720 以下。かなり明確に叙べている。
なお、それに関して、拙稿『主体的自然について——近代的自然観の転換——』（『立命館文学』一九七四年、三五二—三五四合併号）参照。
- (3) カウルバッハは一九八一年十一月二十一日、日本カント協会の学会における講演『カント哲学の見地から見た自然の諸相』のなかで、その思想を述べ、私の注意をひいた。なお、F. Kaulbach: *Das Prinzip Handlung in der Philosophie Kants*, 1978, Walter de Gruyter, S. 228, 271 f. vgl.
- (4) K. d. U., §. 61.
- (5) であるからこそ「カントにおける『経験の形而上学』*Metaphysik der Erfahrung* は、同時に『自然の形而上学』*Metaphysik der Natur* である」。
- (6) 経験的な理解における「自然とは、諸現象の連関が……一部略……、必然的な規則、すなわち原則 *Grundsätze* に従っている」とも、それら諸現象の連関のことであろう。（K. d. U., V. B. 263）*メ*・カントは書いている。
- (7) このことは、カントにおいては、見落されてはならない（拙稿『自然目的と物それ自体——カントの批判哲学における判断力の役割——』『立命館文学』一九八二年、四三九—四四一合併号）。
- (8) 私は、カントにおいて、「自然の目的」*Zweck der Natur* と「自

然目的」Naturzweckeとは区別するべきものと考えてゐる（前掲抽稿）。

(9) A. N. Whitehead: *The Concept of Nature*, Cambridge, 1955, p. 3f.

(10) そのほかとして、抱負した著作、『自然哲学の諸理念 *Ideen zu einer Philosophie der Natur*, 1797』や、『自然哲学の体系構想 *Skizze einer Einleitung zu dem Entwurf eines Systems der Naturphilosophie*, 1799』が成立したことがあった。

この「客観的」立場の「カントとの関係において強調がある。カントは『nexus finalis』としての自然観の成立は、この「判断主体との関係において」とあって、客観的ではなご。同じく、先験哲学 *transzendentaler Philosophie* の立場をとつてつづき、それが、カントとヘーゲルとは決定的なちがう。

カントの先験哲学は批判主義の節度を保とうとする。それを飛び越しようとしたのは、シェリングの、知的直観を方法とする思惟にちがひがあった。

(11) Schelling: *Ideen zu einer Philosophie der Natur*; Werke hg. von W. Schröter, I, S. 704.

(12) カントは、「自己目的としての在り様を」「自分自身から、原因であつて、かゝる結果である」ものと規定して、「自分自身を有機的に機能する存在と見做す」*das sich selbst organisierende Wesen* と呼ぶ（*K. d. U.*, §. 65）。

(13) ノーボラの『知識者』との関係についていえば、シェリングは、*Objekt Akt, Handlung* のうちで「存在」をみる存在論を、フヒテから学びとりつゝ、自然哲学に関しては、フヒテは、意識の先験的前史を欠いてゐるとするが、シェリングのフヒテ批判でもさう（vgl. M. Frank: *Eine Einführung in Schellings Philosophie*, Suhrkamp, 1985, S. 104-107）。「そのちがひ」は二人の間の差

はあつたといえよう。ただし、最近、ラウト教授は、フヒテにもそれなりの自然哲学はあつたと説く（vgl. R. Lauth: *Die transzendentale Naturlehre Fichtes nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre*, Felix Meiner Verl., 1984）。

* 抽稿『私たちがつてのフヒテ——行為としての存在論の試み——』、『立命館文学』第五〇号（一九八七）

(14) Schelling: *Erster Entwurf eines Systems der Naturphilosophie*, 1798-99, W. Schröter, II, S. 12.

(15) フヒテの『*Tathandlung*』の定義ともなつてゐる「事行」という訳語については、私には、いさゝかためらいがあり、「自己一定立」の働きのつもりと思つた（小稿『人間』というもの——自己 *Sei* はどこに成立するか』『世界思想』一九八九年春、第十六号参照）。

(16) Schelling: a. a. O., S. 17.

(17) 一方で、『思弁的（＝理論的）自然学』*spekulative Physik* とも呼ばれた、シェリングのデユナミックは、その細説ということになると、当時においても、後の世においても、不評をかいがちであつた。

しかし、そのデユナミックの基本的構図は、後の、およそシェリングとは縁遠いホワイトヘッドの『*オーガニズムの哲学*』と共通するものがあり、興味深い。これに関しては、抽稿『主体的自然について——近代的自然観の転換——』、『立命館文学』一九七四年、三五一—三五四合併号）。

(18) 安藤昌益の『*統道真伝*』や『*自然真管道*』からの引用は、寺尾監修の全集版（農文協）による。

(19) 安永寿延『*オノソカラなるもの——近世思想における自然と人間——*』、『*文学*』岩波、一九七三、六、Vol. 41, 52（ページ）

(20) Aristotle: *De Anima*, II, 1, 412a.

(21) 昌益は、『*自り感*』として「他ヲ後ツニ非ス」（*統道真伝*）という。その展開過程を叙述するのが、シェリングのデユナミックであり、

磁石的、電氣的、化學的といった三層位の展開から、世界全体を自然史の過程として描くところに、その特徴はある。

(23) 一方、昌益のコスモロジーにも、「生生」の世界を「真氣」の顯現として描きつつ、やはり、トリアスの論理(「三氣」の相互作用)を窺わせるものがある、興味深い、その世界をひとつの「史的過程」として叙述する発想は乏しい。(東条栄喜は「循環自然論」と呼んでいる。『直耕』4号、一九八九年)。そこに両者の決定的なちがいはある。

(24) Schelling: *Stuttgartter Privatvorlesungen*, W. Schröter, IV, S. 319.

(25) 「文化としての自然」(池井望 『世界思想』一九八八年春 第十五号) 「制度としての自然」(中村雄二郎 『制度としての自然と漱石』 『文学』一九七三・六) 論も、それなりに興味ぶかいが、私としては、それをより大きく包括する自然のシステムが考えられないか、と思ふ。

(にしかわ・とみお、ドイツ哲学、立命館大学教授)